

そもそもこの頃のこと

森 淳司

記憶というものはあてにならない。古代文学会の、そもそもこのことを書く約束をしましてから、はじめからの方々^{かたがた}数人に電話をしてみた。わたくしの記憶をたしかめるためである。どなたたちが口火をきってそのそもそもが動き出したのか、それは今の会にとっていけないことのようなではあるが、もし書いておくとすれば、誤りをすこしでも少なくしようと思つての電話だった。ところが十人十色―数人数色?―それぞれ微妙なところに揺れがあつて、それに、わたくしをはじめ、どなたも日記らしいものをつけていないらしくて、結局は「古代文学」の創刊号あたりをご覧になつたらということになつてしまった。とすれば、わたくしはもう無用で、何をどう書けばよいか迷うばかり。記憶というものはほかの方^{かた}でもあてにならないのだから、ましてわたくしの、二十年ふた昔前のそれは、あやしいこと必定と思し召されたい。

それは昭和三十三年の終わり頃か、四年のはじめ頃か、二、三十代の、これからという人達が、これからの古代研究や会のあり方をめぐつて、いろいろと模索し提言した時期があつた。そしてその末席をわたくしもけがしてゐた。誤解のないようにいえば、その集いは実に真摯でまた純粹で、さわやかなものだった。すでに「上代文

学会」があるのだからといった声もなかったが、新鮮な研究をゆっくり時間をとつて、報告し合おうということになった。もとよりはじめは勉強会の計画で、機関誌など思いもよらなかつた。

ここで、いささかわたくしにひきつけて、朦朧としつつある記憶の糸をたぐると、多分七人の、侍さんたちが浮んでくる。わたくしはその当時、遅い結婚のしたてで、中野の駅近くに住んでゐた。お前のところが便利だから、ということだったろうか、勉強会の二、三回済んだ頃、その同じ面々が集まつて、折角報告したものを、やはり世に問う機関誌を出そうという相談がまとまつた。まったく自然なりゆきだつたと思われる。しかしいろいろの障りもともなわないわけではなかつた。だいち先立つものはゼロだったし、ある特定の主義主張で貫かれた集いでもなかつたから。でも、何時間かの論議の末にまとまつたのは、「上代」に加えて、より身近な、より自由な、発表誌「古代文学」をもとうということだった。若い熱気があつたからできたのだつたと思う。

「古代」はさまざまな困難を克服してなつた。だれが主導したとかなんとかいうことになしに、わたくしを除いて、みんな真摯に研究のための意見をいう気鋭のさむらいたちだつたように思う。

いま、かつてを回想するよすがにと、「創刊の辞」なるものを読みかえてみた。どなたかの草案になるものをあげつらつては礼を失するが、さほど長くもない文章に、「研究」ということばが十数回、「学問」ということばが数回用いられている。いかに「学問・研究」にひたすらになつてゐたかをそれは語つていようし、ややぎ

こちないかたくなさを払拭し得ないままに、「学閥・学統」「学风・学色」といったことばが散見される。これもいわずに純粹であろうとしたその当時、その折の集いの雰囲気象徴しているように、わたくしには思われる。とにもかくにも、わたくしをも含めたわたくしたちはことをはかり、ことをなした。それは、当時の万葉を中心とした上代の文学研究の世界のなかに、ささやかではあっても、ひとつの石をなげ、そしてその波紋を、ある場合さざ波として、みずからの岸辺で受け止めることをそれぞれが、余儀なくさせられたよな気もしないではない。

若い、ということには有難いことでもあったようだ。先輩の諸先生方も、ある時はきびしく、またある時はあたたかく、わたくしどものこの会のありかたやゆく手に、時に助言して下さったり、時においさめ下さったり、場合によりおはげましたいだいたりしたものであった。

投げられた賽は所詮はとりかえして投げる以前に戻すことはあり得ようもないことで、たとえ、かりに悪しざまに非難されようとも、歩み出した以上は、地道に堅実に、しかもその歩調を乱すことなく歩みつづけたつもりであったし、またおおかたの諸先輩諸先生方も、わたくしたちの真意をやがてはご理解いただけた模様だった。有難いことである。

ものいえば唇寒しということばを、日頃わたくしは自信のないひがみ屋さんの言と思っている。

心の小径はものをいい、ものを書くことによっておのずから通うものと信ずる。敢えてそもそももの頃のことを、おおけなくも認める

所以はそこにある。

その後、古代は当然のこと大きく変わっていった。

はじめ、勉強会第一主義で、それぞれがおのがじしはげみ進めた課題を報告し、互いに批判し合いながら切磋琢磨する報告会から、「古代文学」なる発表誌をもつ学会を組織し、更には大会という年中行事をもつようになり、いつの頃からか特定課題のシリーズ「古代文学」を発刊するようにもなり、近年はとりわけ共同研究による豊かな総りを目指しての企画が立案され、日本の古代研究のいっかくにゆるぎない地歩を占むるまでになったかに思われる。まさに双手をあげて、うちうちながら、よそごとのように慶賀し贅辞をお送りするわたくしのこのごろである。

そして、何よりも有難いことは、創始の頃の趣意、正月も師走もなく、月一回、たつぷりと時間をかけての日頃の成果の報告と、それについての討論が、世代の交代にもかかわらず、むしろその交代によってこそ益々純粹に、学閥や学統を離れて真摯に、古代の学問研究がなされつつあるやに思われるこのごろである。

老兵は怠りがちなれど、消ゆるにはいまだ早し。そもそももの頃にたちかえって、またお仲間入りをと願うこと切なるこのごろでもある。